

Oracle® Enterprise Service Bus

インストール・ガイド

10g (10.1.3.1.0) for UNIX Systems and Microsoft Windows

部品番号 : B31902-01

2006 年 11 月

Oracle Enterprise Service Bus インストール・ガイド, 10g (10.1.3.1.0) for UNIX Systems and Microsoft Windows

部品番号 : B31902-01

原本名 : Oracle Enterprise Service Bus Installation Guide, 10g (10.1.3.1.0) for UNIX and Microsoft Windows

原本部品番号 : B28213-01

原本著者 : Rima Dave

原本協力者 : Nirguna Kota, Vinaye Misra, Ingrid Stuart, Subramanian Hariharan, Amitabh Nandan, Eric Belden, Jim Peng, Vined Nimmagadda

Copyright © 2006, Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle, JD Edwards, PeopleSoft, Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性がります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	v
対象読者	vi
ドキュメントのアクセシビリティについて	vi
関連ドキュメント	vi
表記規則	vi
サポートおよびサービス	vii
1 Oracle Enterprise Service Bus のインストールの概要	
Oracle Enterprise Service Bus のコンポーネントの概要	1-2
Oracle Enterprise Service Bus のインストール・シナリオ	1-3
シナリオ 1: Oracle Enterprise Service Bus with Oracle SOA Suite	1-3
シナリオ 2: Oracle Enterprise Service Bus for OracleAS Middle Tier のインストール	1-4
アップグレードされた OracleAS Middle Tier へのインストール	1-4
Oracle Enterprise Service Bus のシステム要件	1-4
オペレーティング・システムおよびコンピュータの要件	1-5
サポートされるデータベース	1-6
Java Development Kit のサポート	1-6
Oracle Enterprise Service Bus Console での使用がサポートされている Web ブラウザ	1-6
グローバリゼーション・サポート	1-7
Oracle Enterprise Service Bus Console およびサーバーのロケール	1-7
XSLT マッパー解析	1-7
2 Oracle Enterprise Service Bus のインストール	
Oracle Enterprise Service Bus のインストールの概要	2-2
Oracle Enterprise Service Bus CD-ROM の内容	2-2
インストール作業のサマリーと手順の参照先	2-2
Oracle Enterprise Service Bus のインストール前の作業	2-3
手順 1: Oracle Database のインストール（まだインストールされていない場合）	2-4
手順 2: データベースでの Integration Repository Creation Assistant の実行	2-4
手順 3: Oracle Application Server のインストールまたはアップグレード	2-4
Oracle Enterprise Service Bus のインストール作業	2-5
Oracle Enterprise Service Bus のインストール後の作業	2-8
手順 1: 推奨 - デフォルト・パスワードの変更	2-8
手順 2: 推奨 - UNIX/Linux での path の更新	2-8
Oracle Enterprise Service Bus のディレクトリ構造の理解	2-9

サイレントおよび非対話のインストールおよび削除	2-9
サイレント・インストール	2-10
非対話インストール	2-10
インストール前	2-11
レスポンス・ファイルの作成	2-11
テンプレートからのレスポンス・ファイルの作成	2-11
インストーラのレコード・モードを使用したレスポンス・ファイルの作成	2-11
変更が必要なレスポンス・ファイル内の変数	2-12
レスポンス・ファイルの例	2-12
インストールの開始	2-13
インストール後	2-13
サイレントおよび非対話インストールのセキュリティ上のヒント	2-13
サイレント削除	2-14
Oracle Enterprise Service Bus の削除	2-14

A Integration Repository Creation Assistant

Integration Repository Creation Assistant について	A-2
システム要件	A-2
Integration Repository Creation Assistant の実行	A-2

索引

表一覧

1-1	Oracle Enterprise Service Bus をインストールするためのシステム要件	1-5
2-1	Oracle Enterprise Service Bus for OracleAS Middle Tier	2-3
2-2	送信 HTTP プロキシ情報	2-6
2-3	Oracle Enterprise Service Bus でインストールされるコンポーネントのディレクトリ構造	2-9

はじめに

このマニュアルは、Oracle Enterprise Service Bus のインストールに関する主な情報源です。

対象読者

このドキュメントは、Oracle Enterprise Service Bus をインストールするすべてのユーザーを対象としています。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし一部のスクリーン・リーダーは括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。

関連ドキュメント

詳細は、次の Oracle ドキュメントを参照してください。

- ご使用のオペレーティング・システムに対応した『Oracle Application Server インストール・ガイド』
- 『Oracle Database インストール・ガイド』
- 『Oracle Application Server 管理者ガイド』
- 『Oracle Application Server エンタープライズ・デプロイメント・ガイド』

表記規則

この項では、このマニュアルの本文で使用される表記規則について説明します。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連付けられている GUI 要素または本文中や用語集で定義されている用語を示します。
イタリック	イタリック体は、特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落中のコマンド、URL、コード例、画面に表示されるテキストまたは入力するテキストを示します。

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

Oracle Enterprise Service Bus の インストールの概要

この章では、Oracle Enterprise Service Bus のコンポーネントの概要、インストール例およびシステム要件のリストが提供されています。内容は、次のとおりです。

- [Oracle Enterprise Service Bus のコンポーネントの概要](#) (1-2 ページ)
- [Oracle Enterprise Service Bus のインストール・シナリオ](#) (1-3 ページ)
- [Oracle Enterprise Service Bus のシステム要件](#) (1-4 ページ)

Oracle Enterprise Service Bus のコンポーネントの概要

エンタープライズ・サービス・バスにより、企業内および企業外の複数のエンドポイント間でデータを転送できます。ビジネス・ドキュメント (Extensible Markup Language (XML) メッセージとして) の異種アプリケーション間での結合、変換およびルーティングには、オープン標準が使用されます。これにより、既存のアプリケーションへの影響を最小限に抑えてビジネス・データを監視および管理できます。エンタープライズ・サービス・バスは、サービス指向アーキテクチャ (SOA) およびイベント駆動アーキテクチャ (EDA) を配信するための基礎となるインフラストラクチャです。

図 1-1 に示されているとおり、Oracle Enterprise Service Bus は次のコンポーネントから構成されています。

- ESB サーバー

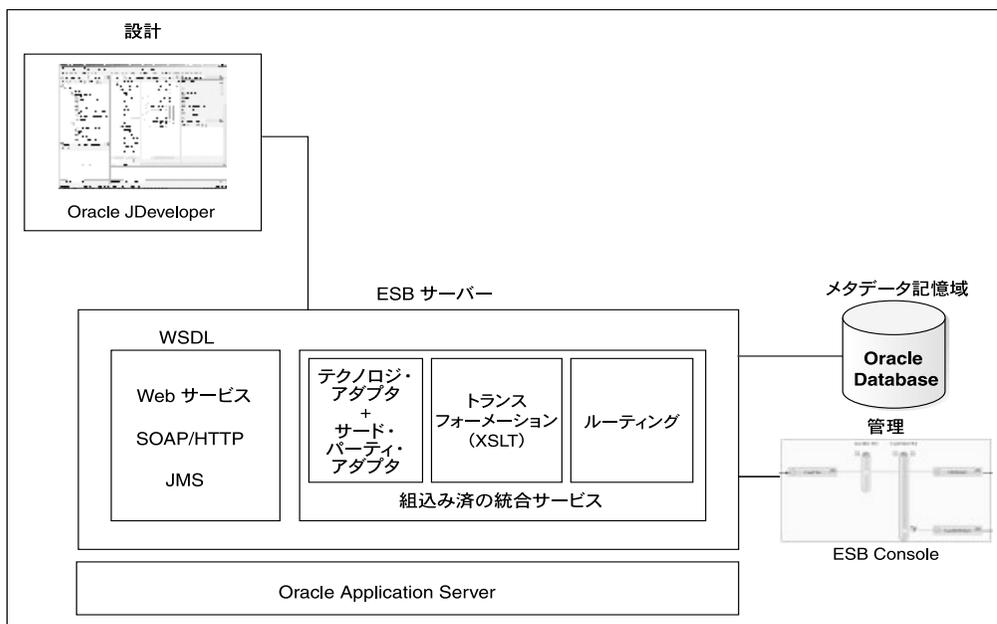
ESB サーバーは、Oracle JDeveloper を使用して設計し、ESB Console を使用して構成した ESB サービスを登録するサーバーです。ESB サーバーでは HTTP/SOAP、JMS、JCA、WSIF および Java を含む複数のプロトコル・バインディングがサポートされ、同期 / 非同期、リクエスト / リプライまたはパブリッシュ / サブスクライブの各モデルを使用した保証付きで信頼できるメッセージ配信が可能です。ただし、ESB サーバーでは Remote Method Invocation (RMI) はサポートされません。
- ESB Console

ESB Console では、ESB サーバーに登録したサービス进行操作、管理およびデバッグするための Web ベース・インタフェースが提供されます。
- ESB メタデータ・サーバー

スキーマ、トランスフォーメーションおよびルーティング・ルールなどの ESB メタデータを保持するデータベースです。
- Oracle JDeveloper

Oracle JDeveloper は、Oracle Enterprise Service Bus システムを構成するサービスをグラフィカルでわかりやすくモデル化、編集および設計するための方法です。

図 1-1 Oracle Enterprise Service Bus アーキテクチャ



関連項目：

- 『Oracle Enterprise Service Bus 開発者ガイド』
- 『Oracle Enterprise Service Bus クイック・スタート・ガイド』
- 『Oracle Application Server Adapter for Files, FTP, Databases および Enterprise Messaging ユーザーズ・ガイド』

Oracle Enterprise Service Bus のインストール・シナリオ

Oracle Enterprise Service Bus のインストール・シナリオを、次の各項で説明します。

- [シナリオ 1: Oracle Enterprise Service Bus with Oracle SOA Suite](#)
- [シナリオ 2: Oracle Enterprise Service Bus for OracleAS Middle Tier のインストール](#)

このマニュアルでは、シナリオ 2 の「Oracle Enterprise Service Bus for OracleAS Middle Tier のインストール」を説明します。Oracle Enterprise Service Bus with Oracle SOA Suite のインストールの詳細は、使用しているオペレーティング・システム用の『Oracle Application Server インストール・ガイド』を参照してください。

シナリオ 1: Oracle Enterprise Service Bus with Oracle SOA Suite

Oracle Enterprise Service Bus は、Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) の Oracle SOA Suite の基本インストールまたは拡張インストールの一部として自動的にインストールされ、設計およびスタンドアロンのテスト環境を提供します。このインストール・タイプを使用して、プロセスを設計し、本番前のデプロイメントおよびテストを実行します。本番の準備ができた後、OracleAS Middle Tier 上で Oracle Enterprise Service Bus を使用して ESB サービスをデプロイします。

Oracle Enterprise Service Bus with Oracle SOA Suite の基本インストールを実行すると、次の各コンポーネントが得られます。

- Oracle ESB サーバー
- Oracle ESB Control
- Oracle Database Lite

注意： Oracle Database Lite は Unicode をサポートするように構成されています。デフォルトでは、DB_CHAR_ENCODING は polite.ini ファイルで UTF8 に設定されています。

Oracle SOA Suite の拡張インストールでは、Oracle Database も使用できます。

注意： 10g (10.1.3.1.0) では、Oracle JDeveloper は Oracle Enterprise Service Bus にバンドルされていません。Oracle Enterprise Service Bus のプロジェクトとともに使用するには、Oracle JDeveloper を別にインストールする必要があります。

SOA Suite のインストールの詳細は、使用しているオペレーティング・システム用の『Oracle Application Server インストール・ガイド』を参照してください。

シナリオ 2: Oracle Enterprise Service Bus for OracleAS Middle Tier のインストール

Oracle Enterprise Service Bus for OracleAS Middle Tier では、サービス・メッセージ・フローを実行するために標準ベースのインフラストラクチャが提供されます。インストールの前に、Oracle Application Server Integration Repository Creation Assistant (IRCA) を実行し、Oracle Enterprise Service Bus で使用できるように、Oracle Database を構成します。

「Oracle Enterprise Service Bus for OracleAS Middle Tier」インストール・タイプを選択すると、次のコンポーネントがインストールされます。

- ESB サーバー
- ESB Console

このインストール・タイプでは、Oracle Enterprise Service Bus をインストールする Oracle ホームに、Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) の J2EE と Web サーバー・インスタンスまたは J2EE サーバー・インスタンスがインストールされている必要があります。

J2EE サーバーおよび Web サーバー中間層のインストールの詳細は、使用しているオペレーティング・システム用の『Oracle Application Server インストレーション・ガイド』を参照してください。

アップグレードされた OracleAS Middle Tier へのインストール

現在 Oracle Application Server 10g リリース 3 (10.1.3) Middle Tier を使用している場合、Oracle Enterprise Service Bus をインストールする前に適切なパッチ・セットを使用して 10g (10.1.3.1.0) にアップグレードする必要があります。

関連項目： 詳細は、Oracle Technology Network (<https://www.oracle.com/technology/index.html>) にアクセスしてください。

Oracle Enterprise Service Bus のシステム要件

この項では、Oracle Enterprise Service Bus に必要なオペレーティング・システムおよびシステムの要件と、Oracle Enterprise Service Bus により提供されるデータベース、グローバリゼーションおよび Web ブラウザのサポートを説明します。

Oracle Enterprise Service Bus with Oracle SOA Suite インストールのシステム要件は、使用しているオペレーティング・システム用の『Oracle Application Server インストレーション・ガイド』を参照してください。

注意： ここで提供される情報は、このマニュアルの発行時点でサポートされているプラットフォームを反映したものです。サポートされているプラットフォームの最新リストは、Oracle のお客様が利用可能な Oracle Metalink (<https://metalink.oracle.com/>) の「Certify」タブを参照してください。

オペレーティング・システムおよびコンピュータの要件

Oracle Enterprise Service Bus をインストールする前に、インストール先のコンピュータが表 1-1 に説明された要件を満たしていることを確認してください。

表 1-1 Oracle Enterprise Service Bus をインストールするためのシステム要件

要素	要件
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"> ■ Sun SPARC Solaris バージョン 8、9 および 10 関連項目: 必要なオペレーティング・システム・パッチ、パッケージ、スワップ領域要件およびカーネル・パラメータの設定の詳細は、『Oracle Application Server インストール・ガイド for Solaris Operating System (SPARC 64-bit)』を参照してください。 ■ Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 および 4.0 ■ SUSE Linux Enterprise Server 9 関連項目: 必要なオペレーティング・システム・パッチ、パッケージ、スワップ領域要件およびカーネル・パラメータの設定の詳細は、『Oracle Application Server インストール・ガイド for Linux』を参照してください。 ■ Windows 2000 Service Pack 3 以上 ■ Windows Server 2003 Service Pack 1 以上 ■ Windows XP Service Pack 2 以上 注意: Windows XP Service Pack 2 を実行している場合、次の Oracle MetaLink にある Document ID 280874.1 を参照してください。 https://metalink.oracle.com 関連項目: プロセッサ、TEMP ディレクトリ、仮想メモリおよびスワップ領域の要件の詳細は、『Oracle Application Server インストール・ガイド for Microsoft Windows』を参照してください。 注意: この表にリストされていないオペレーティング・システムのサポートについては、Oracle MetaLink (https://metalink.oracle.com) の「Certify」の項を調べてください。UNIX ベースのオペレーティング・システムで、この表にはリストされていない場合でも「Certify」のリストでサポート済となっている場合は、このマニュアルで UNIX 用と示された手順および（必要なオペレーティング・システム・パッチ、パッケージ、スワップ領域の要件およびカーネル・パラメータの設定については）そのオペレーティング・システム用の『Oracle Application Server インストール・ガイド』を参照してください。Oracle Enterprise Service Bus for OracleAS Middle Tier は、「Certify」にリストされたすべてのオペレーティング・システムでサポートされています。
ディスク領域	2GB 注意: この他に 400MB の一時領域が必要です。
メモリー	1.5GB
スワップ領域	512MB 以上
モニター	256 色以上の表示構成

サポートされるデータベース

次のデータベースが、Oracle Enterprise Service Bus のインストールでの使用でサポートされています。

- Oracle9i Database リリース 2 (9.2.0.7) 以上
- Oracle Database 10g リリース 2 (10.2.0.2) 以上
- Oracle Database 10g リリース 1 (10.1.0.5) 以上
- Oracle Database 10g Express Edition バージョン 10.2.0.1.0 は、本番以外の目的に使用できません。詳細は、次の場所を参照してください。

<http://www.oracle.com/technology/products/database/xe/>

関連項目：

- 使用しているバージョンの Oracle Database に必要なパッチの詳細は、Oracle MetaLink (<https://metalink.oracle.com>) の「Patches & Updates」タブを参照してください。
- サポートされる Oracle Application Server Metadata Repository データベースの詳細は、使用しているオペレーティング・システム用の『Oracle Application Server インストレーション・ガイド』を参照してください。

Java Development Kit のサポート

このリリースの Oracle Enterprise Service Bus は、Java Development Kit (JDK) 1.5 での使用を保証されています。

Oracle Enterprise Service Bus Console での使用がサポートされている Web ブラウザ

Oracle Enterprise Service Bus Console では、次の Web ブラウザがサポートされています。

- Internet Explorer 6.0 SP2 (Microsoft Windows でのみサポート)
- Mozilla 1.7
- Firefox 1.0.4
- Netscape 7.2

注意： Oracle Enterprise Service Bus Console は Apple Safari Web ブラウザをサポートしていません。

注意： Web ブラウザで Cookie が有効になっていることを確認してください。Oracle Enterprise Service Bus のキャッシュ機能は、Cookie を使用してユーザー・セッションを識別します。

グローバリゼーション・サポート

この項では、グローバリゼーションおよび XSLT マッパー解析について説明します。内容は、次のとおりです。

- [Oracle Enterprise Service Bus Console およびサーバーのロケール](#)
- [XSLT マッパー解析](#)

Oracle Enterprise Service Bus Console およびサーバーのロケール

Oracle Enterprise Service Bus Console で使用可能な言語は、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、日本語、韓国語、簡体字中国語および繁体字中国語です。

Oracle JDeveloper は、英語および日本語で使用可能です。Oracle Enterprise Service Bus Console および Oracle JDeveloper では、特定のページ上で Oracle Enterprise Service Bus サーバーのサーバー・ロケールからテキスト・メッセージを抽出して表示します。言語が混在して表示されないようにするには、Oracle Enterprise Service Bus Console および Oracle Enterprise Service Bus サーバーが同じロケールを使用していることを確認してください。

XSLT マッパー解析

XSLT マッパー解析では、オペレーティング・システムがファイルから XSL コンテンツを読み込むために 8-bit Unicode Transformation Format (UTF-8) エンコードを使用します。したがって、XSL コンテンツが UTF-8 でエンコードされていない場合に解析エラーが発生する場合があります。

Oracle Enterprise Service Bus の インストール

この章では、Oracle Enterprise Service Bus のインストールと削除の方法および関連作業について説明します。内容は、次のとおりです。

- [Oracle Enterprise Service Bus のインストールの概要](#) (2-2 ページ)
- [Oracle Enterprise Service Bus のインストール前の作業](#) (2-3 ページ)
- [Oracle Enterprise Service Bus のインストール作業](#) (2-8 ページ)
- [Oracle Enterprise Service Bus のインストール後の作業](#) (2-8 ページ)
- [Oracle Enterprise Service Bus のディレクトリ構造の理解](#) (2-9 ページ)
- [サイレントおよび非対話のインストールおよび削除](#) (2-9 ページ)
- [Oracle Enterprise Service Bus の削除](#) (2-14 ページ)

Oracle Enterprise Service Bus のインストールの概要

この項では、Oracle Enterprise Service Bus のインストール作業の概要を説明し、作業の実行手順に関する参照先を提供します。内容は、次のとおりです。

- [Oracle Enterprise Service Bus CD-ROM の内容](#)
- [インストール作業のサマリーと手順の参照先](#)

Oracle Enterprise Service Bus CD-ROM の内容

Oracle Enterprise Service Bus の製品 CD-ROM のトップ・レベルには、次のファイルおよびディレクトリが含まれています。

- README_ESB.txt – このリリースの readme ファイルで、インストールを開始する前に読んでおく必要がある重要な情報が記載されています。
- esb – インストールするソフトウェアを含んだディレクトリ
- doc – インストレーション・ガイドを含んだディレクトリ

インストール作業のサマリーと手順の参照先

この項では、Oracle Enterprise Service Bus for OracleAS Middle Tier のインストール作業の概要を説明します。

注意： 表 2-1 に示されている Integration Repository Creation Assistant は、Oracle Database に Oracle Enterprise Service Bus のユーザーおよびスキーマを作成するユーティリティです。詳細は、[付録 A 「Integration Repository Creation Assistant」](#) を参照してください。

表 2-1 は、Oracle Enterprise Service Bus for OracleAS Middle Tier に対して実行するインストール作業の概要です。

表 2-1 Oracle Enterprise Service Bus for OracleAS Middle Tier

目的	実行手順	関連項目
	1. まだインストールされていない場合は、Oracle Database をインストールします。	『Oracle Database インストール・ガイド 10g』 または
	関連項目 : 1-6 ページ「サポートされるデータベース」	使用しているオペレーティング・システム用の『Oracle Database インストール・ガイド 9i』
	2. Integration Repository Creation Assistant (IRCA) を使用して、Oracle Database に Oracle Enterprise Service Bus のスキーマとユーザーを作成します。IRCA を実行するための .bat/.sh スクリプトは、インストール CD の install/soa_schemas ディレクトリにあります。	2-4 ページ「手順 2: データベースでの Integration Repository Creation Assistant の実行」
	3. Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) をインストールして、「J2EE サーバー」または「J2EE と Web サーバー」のいずれかのインストール・タイプを選択します。	使用しているオペレーティング・システム用の『Oracle Application Server インストール・ガイド』
	4. Oracle Enterprise Service Bus for OracleAS Middle Tier をインストールします。	2-5 ページ「Oracle Enterprise Service Bus のインストール作業」

Oracle Enterprise Service Bus のインストール前の作業

この項では、Oracle Enterprise Service Bus for OracleAS Middle Tier のインストール前の手順を説明します。手順は、次のとおりです。

- [手順 1: Oracle Database のインストール](#) (まだインストールされていない場合)
- [手順 2: データベースでの Integration Repository Creation Assistant の実行](#)
- [手順 3: Oracle Application Server のインストールまたはアップグレード](#)

注意： このマニュアルでは、Oracle Enterprise Service Bus for OracleAS Middle Tier のインストールの詳細のみを説明します。Oracle Enterprise Service Bus with Oracle SOA Suite のインストールに関する情報については、使用しているオペレーティング・システム用の『Oracle Application Server インストール・ガイド』を参照してください。

手順 1: Oracle Database のインストール（まだインストールされていない場合）

Oracle Enterprise Service Bus がサービス・メタデータ（XSD、XSLT、ルーティング・ルール、サービス記述および WSDL など）を格納するにはデータベースが必要です。サポートされるデータベースは、1-6 ページの「サポートされるデータベース」にリストされています。

1-6 ページの「サポートされるデータベース」にリストされている要件を満たす Oracle Database がすでにある場合は、データベースを再度インストールする必要はありません。ない場合は、インストールまたはアップグレードしてから先に進みます。

関連項目：

- 『Oracle Database インストール・ガイド for Microsoft Windows (32-Bit)』
- 『Oracle Database インストール・ガイド for Linux x86』
- 『Oracle Database インストール・ガイド for Solaris Operating System (SPARC 64-Bit)』

手順 2: データベースでの Integration Repository Creation Assistant の実行

Integration Repository Creation Assistant を実行してデータベース・ユーザーおよびスキーマを作成します。Integration Repository Creation Assistant では、Oracle Database にデフォルト・ユーザー oraesb、デフォルト・パスワード oraesb および表領域 oraesb が作成されます。

Integration Repository Creation Assistant ユーティリティの実行方法の詳細は、[付録 A 「Integration Repository Creation Assistant」](#) を参照してください。

注意：

- 以前に Oracle Enterprise Service Bus をインストールし、Integration Repository Creation Assistant をこの Oracle Database で実行済みの場合は、再度実行する必要はありません。
- すでに Oracle Enterprise Service Bus のユーザー（oraesb）がターゲット・データベースにある場合は、Integration Repository Creation Assistant を実行する前にそのユーザーに対するすべてのセッション、アクティビティおよびトランザクションを停止してください。これには、Oracle Enterprise Service Bus サーバー、Oracle Enterprise Service Bus Control および Oracle JDeveloper の停止を含みます。

手順 3: Oracle Application Server のインストールまたはアップグレード

Oracle Enterprise Service Bus は、Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) にインストールする必要があります。これには、次のオプションがあります。

- Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) をインストールして、「J2EE サーバー」または「J2EE と Web サーバー」のインストール・タイプを選択します。

関連項目： 使用しているオペレーティング・システム用の『Oracle Application Server インストール・ガイド』を参照してください。

または

- 既存の Oracle Application Server 10g リリース 3 (10.1.3) Middle Tier をアップグレードします。

関連項目： 1-4 ページ「アップグレードされた OracleAS Middle Tier へのインストール」

Oracle Enterprise Service Bus のインストール作業

Oracle Enterprise Service Bus を OracleAS Middle Tier にインストールする前に、2-3 ページの「[Oracle Enterprise Service Bus のインストール前の作業](#)」項にあるとおり、データベースがインストール済である必要があります。このデータベースは、Integration Repository Creation Assistant を実行して必要なデータベース・ユーザーとスキーマが作成された Oracle Database である必要があります (2-4 ページの「[手順 2: データベースでの Integration Repository Creation Assistant の実行](#)」を参照してください)。

Oracle Enterprise Service Bus for OracleAS Middle Tier をインストールする手順は、次のとおりです。

1. 2-3 ページの「[Oracle Enterprise Service Bus のインストール前の作業](#)」にあるインストール前の作業と要件がすべて完了していることを確認します。
2. Oracle Enterprise Service Bus のコンポーネントをインストールするホストにログオンします。
3. Oracle Enterprise Service Bus CD-ROM を挿入します。
4. CD-ROM の esb ディレクトリから、次のようにして Oracle Universal Installer を起動します。

プラットフォーム	操作
UNIX/Linux	オペレーティング・システムのプロンプトで次のコマンドを入力します。 ./runInstaller
Windows	setup.exe をダブルクリックします。

「ようこそ」画面が表示されます。

5. 「次へ」をクリックします。
「ファイルの場所の指定」画面が表示されます。
6. Oracle Application Server 10.1.3.1.0 の J2EE と Web サーバー・インスタンスまたは J2EE サーバー・インスタンスがある Oracle ホームの名前とディレクトリ・パスを選択します。

注意:

- Oracle Enterprise Service Bus をインストールする中間層内の OC4J インスタンスの名前は、12 文字を超えてはいけません。
- デフォルトの名前およびパスは使用しないでください。インストーラは、Oracle Application Server 10.1.3.1.0 の J2EE と Web サーバー・インスタンスまたは J2EE サーバー・インスタンスを検索します。間違ったパスを指定すると、「依存コンポーネント」警告が表示されます。次の例に示されたとおり名前およびパスを入力してください。

UNIX/Linux の例

Name: Home1
Path: /home/oracle/OraHome_1

Windows の例

Name: Home1
Path: C:¥OraHome_1

- 「ソース」フィールドのディレクトリ・パスは変更しないでください。これはインストール・ファイルの場所です。

7. 「次へ」をクリックします。
「インストール・タイプの選択」画面が表示されます。
8. 「Enterprise Service Bus for OracleAS Middle Tier」を選択して「次へ」をクリックします

注意： Enterprise Service Bus for Developers は、サポートされているオプションではありません。本番前のテストの目的で Oracle Enterprise Service Bus を Oracle SOA の基本インストールの一部としてインストールするには、使用しているオペレーティング・システム用の『Oracle Application Server インストール・ガイド』を参照してください。

「送信 HTTP プロキシ情報の指定」画面が表示されます。

9. インターネットへの直接接続があってプロキシ・サーバーを使用していない場合、またはデフォルトの情報を使用する場合は、「次へ」をクリックします。それ以外の場合は、表 2-2 に示されているように情報を入力します。

注意： この情報は Windows プラットフォームに適用され、使用しているブラウザが「接続」タブの「LAN の設定」の「プロキシサーバー」の情報に従って構成されている場合は自動的に書き込まれます。

ブラウザがプロキシの「自動構成」を使用している場合は、この情報を指定する必要があります。

Windows 以外のプラットフォームでは、プロキシ情報は opmn.xml ファイルに手動で設定されます。

表 2-2 送信 HTTP プロキシ情報

フィールド	説明	例
HTTP プロキシ・ホスト	プロキシ・サーバー・ホストの名前を入力します。	www-proxy.us.acme.com
HTTP プロキシ・ポート	プロキシ・サーバー・ホストのポート番号を入力します。	80
プロキシを経由しないアドレス	プロキシをバイパスするアドレスを入力します。2 つ以上のアドレスをそれぞれセミコロン (;) で区切って入力できます。	*.us.acme.com;*.us.acme.com;<local> 注意： <local> タグにより、ホスト名が自動的にバイパス・プロキシ・リストに含められません。

「データベースの指定」画面が表示されます。

10. 次の表に説明されているとおり、詳細を指定します。

情報	説明	例
データベース・タイプ	「Oracle Database」である必要があります。	なし
ホスト名とポート	データベース・ホストの完全名または IP アドレスとリスナー・ポート。 デフォルトのリスナー・ポートは 1521 です。	my-pc.acme.com:1521 または 137.1.18.228:1521

情報	説明	例
サービス名	データベースのインストール時に指定したサービス名。デフォルトのサービス名は <code>orcl</code> で、データベースの完全修飾ドメイン名 (FQDN) の先頭に付け加えられます。 これは SID ではありません。 不明な場合は、SQL*Plus コマンドの <code>show parameter service_names</code> を実行してください。	<code>orcl</code> または <code>orcl.us.acme.com</code>
ORAESB スキーマ・パスワード	ユーザー <code>oraesb</code> に割り当てられたパスワード。インストール前の作業中にこのパスワードを変更している場合があります。 <code>oraesb</code> ユーザー・アカウントの詳細は、2-4 ページの「 手順 2: データベースでの Integration Repository Creation Assistant の実行 」を参照してください。	なし

注意： 1つのデータベースに複数の ESB リポジトリをインストールする場合、2つ目のリポジトリのインストールで既存の ESB メタデータ構成 (具体的には `ESB_PARAMETER` 表内の古い値) が上書きされます。この場合、2つ目のリポジトリをインストールする前に `ESB_PARAMETER` 表をエクスポートし、2つ目のリポジトリのインストールが完了した後に `ESB_PARAMETER` 表をインポートする必要があります。

`ESB_PARAMETER` 表のインポートおよびエクスポートの詳細は、『Oracle Application Server エンタープライズ・デプロイメント・ガイド』の ESB メタデータの更新に関する項を参照してください。

11. 「次へ」をクリックします。

注意： データベース接続の確立には数分かかります。

「管理 (Administration) 設定」画面が表示されます。

12. 管理者のパスワードを指定します。これは Oracle Application Server 管理者のパスワードと一致する必要があります。

注意： Oracle Enterprise Service Bus を、Oracle Application Server Infrastructure 10.1.2.0.2 の Oracle Internet Directory に関連付けられている、パッチを適用した 10.1.3.1.0 J2EE インスタンスにインストール中に、バックグラウンド・コンソールに次のメッセージが表示される場合があります。

The operation is unsupported.

このメッセージは無視してかまいません。

13. 「次へ」をクリックします。

「ESB タイプの選択」画面が表示されます。

14. 次のオプションの 1 つを選択します。

- リポジトリ: リポジトリのみをインストールする場合
- ランタイム: ランタイムのみをインストールする場合
- リポジトリおよびランタイム: リポジトリおよびランタイムをインストールする場合

15. 「次へ」をクリックします。
「サマリー」画面が表示されます。
16. 「インストール」をクリックします。
インストール画面が数秒間表示された後、「コンフィギュレーション・アシスタント」画面に次の項目が表示されます。
 - Oracle ESB Configuration Assistant
 - Oracle Process Management and Notification Configuration Assistantインストーラが各コンフィギュレーション・アシスタントを連続して自動的に実行し、「ステータス」欄に進行状況を表示します。この画面で必要な操作はありません。
インストールが終了すると、確認用の情報を含んだ「インストールの終了」画面が表示されます。
17. 「終了」をクリックし、プロンプトが表示されたら確認します。
「スタート・ガイド」ページが表示されます。
これでインストール手順が完了します。

Oracle Enterprise Service Bus のインストール後の作業

Oracle Enterprise Service Bus をインストールした後、次の各項で説明されているインストール後の作業手順を実行します。

- [手順 1: 推奨 - デフォルト・パスワードの変更](#)
- [手順 2: 推奨 - UNIX/Linux での path の更新](#)

手順 1: 推奨 - デフォルト・パスワードの変更

製品の使用を開始する前に、すべてのデフォルト・パスワードを変更することが重要です。

Oracle Containers for J2EE (OC4J) は、Oracle Enterprise Manager 10g の URL にアクセスするためのデフォルト・パスワード (welcome1) とともにデプロイされます。インストール後ただちにこのパスワードを変更します。

インストールとともに、default という名前の初期ドメインも作成されます。Oracle Enterprise Service Bus Control から、ESB ドメインを作成して Oracle Enterprise Service Bus サーバーのプロパティを構成できます。Oracle Enterprise Service Bus Control のパスワードは、自動的に oracle に設定されています。インストール後ただちにこのパスワードを変更します。

default および esbadmin という名前の 2 つのユーザー・アカウントが、Oracle Enterprise Service Bus のインストールとともに自動的に作成されます。このアカウントの初期パスワードは、どちらも welcome1 です。インストールが完了した後、ただちに両方のアカウントのパスワードを変更します。

default ユーザーは default ドメインにアクセスできます。esbadmin ユーザーはすべてのドメインにアクセスできます。

手順 2: 推奨 - UNIX/Linux での path の更新

UNIX または Linux プラットフォームにインストールした後、Oracle_Home/integration/esb/bin を path に追加します。これで、obant.sh および obversion.sh などの便利なコマンドが使用できるようになり、サンプルのデプロイと実行も容易になります。

Oracle Enterprise Service Bus のディレクトリ構造の理解

表 2-3 に、インストール終了後に作成されるディレクトリ構造を示します。

表 2-3 Oracle Enterprise Service Bus でインストールされるコンポーネントのディレクトリ構造

ディレクトリ	内容
cfgtoollogs	Oracle Universal Installer の構成ツールのログ
diagnostics	Oracle Universal Installer の診断情報
integration	ESB サブディレクトリ
ESB	次の各サブディレクトリ
<ul style="list-style-type: none"> ■ bin ■ config ■ install ■ lib ■ samples 	<ul style="list-style-type: none"> ■ ESB サーバーのバイナリ・ファイルおよびスクリプト・ファイル ■ 構成ファイルおよびプロパティ・ファイル ■ ESB インストーラ関連ファイル ■ Oracle Enterprise Service Bus の JAR ファイル ■ すべてのサンプルおよび関連ファイル
inventory	インストール済の Oracle 製品
jdk	必要な Java Developer's Kit バージョン
jre	Java ランタイム環境ファイルおよびライブラリ
lib	サーブレットの JAR ファイル
OPatch	この製品内のコンポーネントに対するパッチ適用を支援する opatch ユーティリティおよびファイル
oui	Oracle Universal Installer

サイレントおよび非対話のインストールおよび削除

この項では、Oracle Enterprise Service Bus をサイレントおよび非対話モードでインストールおよび削除する方法を説明します。この項の内容は、次のとおりです。

- [サイレント・インストール](#) (2-10 ページ)
- [非対話インストール](#) (2-10 ページ)
- [インストール前](#) (2-11 ページ)
- [レスポンス・ファイルの作成](#) (2-11 ページ)
- [インストールの開始](#) (2-13 ページ)
- [インストール後](#) (2-13 ページ)
- [サイレントおよび非対話インストールのセキュリティ上のヒント](#) (2-13 ページ)
- [サイレント削除](#) (2-14 ページ)

サイレント・インストール

サイレント・インストールでは、グラフィカルな出力やユーザーによる入力がないため、Oracle Enterprise Service Bus のインストールを監視する必要がありません。

Oracle Enterprise Service Bus のサイレント・インストールは、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを供給し、コマンドラインに `-silent` フラグを指定することで実行します。レスポンス・ファイルは、インストーラのプロンプトに答えるための変数やパラメータを含んだテキスト・ファイルです。レスポンス・ファイルにすべての入力を指定してコマンドライン・プロンプトまたはバッチ・モードで起動することで、ユーザーからの直接対話の必要がなくなり、グラフィカル・ユーザー・インタフェースは表示されません。

Oracle Enterprise Service Bus の初めてのインストールの場合は、インストールを開始する前に `oraInst.loc` ファイルを作成する必要があります。ファイルの作成については、2-11 ページの「インストール前」に説明があります。

Oracle Enterprise Service Bus のインストールに続いて、`root` ユーザーとして `root.sh` スクリプトを実行する必要があります。`root.sh` スクリプトにより環境変数の設定が検出されるので、ローカルの `bin` ディレクトリのフルパスが入力できます。

Oracle Enterprise Service Bus のサイレント・インストールは、2 台以上のコンピュータに類似したインストールがある場合に使用します。その他、リモート位置からコマンドラインを使用して Oracle Enterprise Service Bus のインストールを実行する場合にもサイレント・インストールを使用します。

非対話インストール

非対話インストールでも、レスポンス・ファイルを使用して Oracle Application Server のインストールが自動化されます。非対話インストールでは、グラフィカルな出力がありユーザーの入力は可能です。

Oracle Enterprise Service Bus の非対話インストールも、Oracle Universal Installer にレスポンス・ファイルを供給し、コマンドラインに `-silent` フラグを指定することで実行します。レスポンス・ファイルは、インストーラのプロンプトに答えるための変数やパラメータを含んだテキスト・ファイルです。インストーラのプロンプトのすべてにはレスポンスが提供されていない場合、インストール時に情報を入力する必要があります。

Oracle Enterprise Service Bus の初めてのインストールの場合は、インストールを開始する前に `oraInst.loc` ファイルを作成する必要があります。ファイルの作成については、2-11 ページの「インストール前」に説明があります。

Oracle Enterprise Service Bus のインストールに続いて、`root` ユーザーとして `root.sh` スクリプトを実行する必要があります。`root.sh` スクリプトにより環境変数の設定が検出されるので、ローカルの `bin` ディレクトリのフルパスが入力できます。

Oracle Enterprise Service Bus の非対話インストールは、インストール時に特定の画面を表示する必要がある場合に使用します。

インストール前

Oracle Enterprise Service Bus の初めてのインストールの場合は、次の手順を実行する必要があります。

1. root ユーザーとしてログインします。

```
prompt> su
```

2. /var/opt/oracle ディレクトリがない場合は作成します。

```
# mkdir /var/opt/oracle
```

3. /var/opt/oracle/oraInst.loc ファイルを作成します。このファイルは、インストーラが使用する inventory ディレクトリを指定します。

vi や emacs などのテキスト・エディタを使用して、ファイルに次の行を入力します。

```
inventory_loc=oui_inventory_directory
```

oui_inventory_directory を、インストーラが inventory ディレクトリを作成するディレクトリのフルパスに置き換えます。例を次に示します。

```
inventory_loc=/opt/oracle/oraInventory
```

oinstall オペレーティング・システム・グループがこのディレクトリに対する書込み権限を持っていることを確認してください。

4. 空の /etc/oratab ファイルを作成します。

```
# touch /var/opt/oracle/oratab
```

5. root ユーザーを終了します。

```
# exit
```

レスポンス・ファイルの作成

サイレントまたは非対話のインストールを実行する前に、インストールに固有の情報をレスポンス・ファイルに提供する必要があります。正しく構成されていないレスポンス・ファイルを使用してインストールを実行しようとすると、インストーラは失敗します。レスポンス・ファイルはテキスト・ファイルで、テキスト・エディタで作成または編集できます。

テンプレートからのレスポンス・ファイルの作成

Oracle Enterprise Service Bus を中間層にインストールするためのレスポンス・ファイルのテンプレートは、Oracle Enterprise Service Bus の Disk 1 CD-ROM の stage/Response ディレクトリにあります。ファイル名は oracle.tip.esb.installtype_Server.rsp です。

インストーラのレコード・モードを使用したレスポンス・ファイルの作成

インストーラをレコード・モードで実行して入力をファイルに保存し、後でレスポンス・ファイルとして使用することができます。この機能は、異なるコンピュータに同一のインストールを実行する場合に便利です。

インストーラをレコード・モードで実行する手順は、次のとおりです。

1. インストーラを、-record および -destinationFile パラメータを指定して起動します。

```
prompt> /path/to/runInstaller -record -destinationFile newResponseFile
```

newResponseFile を、インストーラで作成するレスポンス・ファイルのフルパスに置き換えます。例: /opt/oracle/myJ2EEResponse.rsp

Windows の場合

```
/path/to/setup.exe -record -destinationFile newResponseFile
```

2. インストーラの各画面で、値を入力します。インストーラは、これらの値を `-destinationFile` パラメータで指定されたファイルに書き込みます。

「インストール」ボタンをクリックすると、インストーラは指定されたファイルにすべての値を自動的に書き込みます。この時点で、このコンピュータへのインストールを実行するか、インストールを実行せずに終了できます。

パスワードなどの機密情報はファイルに書き込まれないので、レスポンス・ファイルを使用するにはその前に変更する必要があります。パスワードを設定するには、`sl_adminDialogReturn` パラメータを変更します。生成されたレスポンス・ファイルにパラメータの記述があるか確認してください。

変更が必要なレスポンス・ファイル内の変数

Oracle Enterprise Service Bus の中間層へのインストールの場合、次の変数を変更します。

```
UNIX_GROUP_NAME
FROM_LOCATION
ORACLE_HOME
oracle.tip.esb.midtier:sl_MdConnect
oracle.tip.esb.midtier:s_DBHost="stbck19.us.oracle.com"
oracle.tip.esb.midtier:s_DBPort="1521"
oracle.tip.esb.midtier:s_DBPasswd="oraesb"
oracle.tip.esb.midtier:s_DBSid="db4985.us.oracle.com"
oracle.tip.esb.midtier:iASinstancePW="welcome1"
```

レスポンス・ファイルの例

次の例は、中間層への Oracle Enterprise Service Bus のサイレント・インストール用のレスポンス・ファイルのサンプルです。

```
RESPONSEFILE_VERSION=2.2.1.0.0
UNIX_GROUP_NAME="svrtech"
FROM_LOCATION=/ade_autofs/shiphomes_
linux/releaseBuilder/linux/dailyShiphomes/esb/10.1.3.0.0/daily//060925.2200/Disk1
/stage/products.xml
ORACLE_HOME=/scratch/aime1/work/soa3392
ORACLE_HOME_NAME=soa3392
SHOW_SPLASH_SCREEN=false
SHOW_WELCOME_PAGE=false
SHOW_INSTALL_PROGRESS_PAGE=false
SHOW_COMPONENT_LOCATIONS_PAGE=false
SHOW_CUSTOM_TREE_PAGE=false
SHOW_SUMMARY_PAGE=false
SHOW_REQUIRED_CONFIG_TOOL_PAGE=false
SHOW_OPTIONAL_CONFIG_TOOL_PAGE=false
SHOW_RELEASE_NOTES=false
SHOW_ROOTSH_CONFIRMATION=false
SHOW_END_SESSION_PAGE=false
SHOW_EXIT_CONFIRMATION=false
NEXT_SESSION=false
NEXT_SESSION_ON_FAIL=false
SHOW_DEINSTALL_CONFIRMATION=false
SHOW_DEINSTALL_PROGRESS=false
SHOW_IAS_COMPONENT_CONFIG_PAGE=false
ACCEPT_LICENSE_AGREEMENT=true
RESTART_SYSTEM=<Value Unspecified>
CLUSTER_NODES=<Value Unspecified>
OUI_HOSTNAME=isunnat04.us.oracle.com
PreReqConfigSelections=""
n_ValidationPreReqConfigSelections=0
TOPLEVEL_COMPONENT={"oracle.tip.esb","10.1.3.0.0"}
DEINSTALL_LIST={"oracle.tip.esb","10.1.3.0.0"}
COMPONENT_LANGUAGES={"en"}
```

```

INSTALL_TYPE=installtype_Server
sl_HTTPProxyInfoConfig={"www-proxy.us.oracle.com", "80", "*.oracle.com;*.us.oracle.com
"}
s_configProxyOptions="-http-proxy-required true -http-proxy-host
www-proxy.us.oracle.com -http-proxy-port 80 -http-no-proxy-for
*.oracle.com;*.us.oracle.com"
nValidationHTTPProxyInfoConfig=0
oracle.tip.esb.midtier:sl_MdConnect={"Oracle Database",
"stbck19.us.oracle.com:1521", "", "", "db4985.us.oracle.com", "", "oraesb", ""}
oracle.tip.esb.midtier:s_DBHost="stbck19.us.oracle.com"
oracle.tip.esb.midtier:s_DBPort="1521"
oracle.tip.esb.midtier:s_DBPasswd="oraesb"
oracle.tip.esb.midtier:s_DBSid="db4985.us.oracle.com"
oracle.tip.esb.midtier:iASinstancePW="welcome1"
oracle.tip.esb.midtier:bMaskValidationMD=false
oracle.tip.esb.midtier:nValidationMD=0
oracle.tip.esb.midtier:n_choosedb=0
oracle.tip.esb.midtier:s_dbVendor="oracle"
oracle.tip.esb.midtier:s_esbtype=both
oracle.tip.esb.midtier:sl_adminDialogReturn={"welcome1", "", "default_group^oc4j
_soa", "", ":", ""}
oracle.tip.esb.midtier:bMaskValidationAdminInfo=false
oracle.tip.esb.midtier:n_validateAdminDialogInfo=0

```

インストールの開始

インストーラでレスポンス・ファイルを使用するには、使用するレスポンス・ファイルの位置をインストーラの起動時にパラメータとして指定します。

非対話インストールを実行する場合

```

prompt> setenv DISPLAY hostname:0.0
prompt> runInstaller -responseFile absolute_path_and_filename

```

サイレント・インストールを実行する場合は、`-silent` パラメータを使用します。

```

prompt> runInstaller -silent -responseFile absolute_path_and_filename

```

インストール後

非対話およびサイレント・インストールの成功または失敗は、`installActions<time_stamp>.log` ファイルに記録されます。さらに、サイレント・インストールでは `silentInstall<time_stamp>.log` ファイルが作成されます。このログ・ファイルは `oraInventory/logs` ディレクトリに作成されます。

`silentInstall<time_stamp>.log` ファイルには、インストールが成功の場合には次の行が含まれています。

```
The installation of Oracle Enterprise Service Bus was successful.
```

サイレントおよび非対話インストールのセキュリティ上のヒント

レスポンス・ファイルにある情報の1つは、インストール・パスワードです。このパスワード情報は平文で記載されています。

レスポンス・ファイル内のパスワードに関するセキュリティ上の問題を最小限に抑えるには、次のガイドラインに従ってください。

- レスポンス・ファイルに対する権限を、サイレントまたは非対話インストールを実行するオペレーティング・システム・ユーザーのみが読み取れるように設定します。
- できれば、サイレントまたは非対話インストールの終了後にレスポンス・ファイルをシステムから削除します。

サイレント削除

インストールに使用したレスポンス・ファイルにサイレント削除パラメータを指定することで、Oracle Enterprise Service Bus のサイレント削除を実行できます。

レスポンス・ファイル内の次のパラメータを変更します。

```
REMOVE_HOMES={"<ORACLE_HOME to be removed>"}
```

例を次に示します。

```
REMOVE_HOME="/local_location/oracle_home"
```

注意： この場合も、2-14 ページの「[Oracle Enterprise Service Bus の削除](#)」のクリーンアップ手順に従う必要があります。

サイレント削除を実行するには、コマンドの入力時に `-deinstall` パラメータを使用します。

```
prompt> runInstaller -silent -deinstall -responseFile absolute_path_and_filename
```

Oracle Enterprise Service Bus の削除

Oracle Enterprise Service Bus を削除するには、次の手順に従います。

1. Oracle Enterprise Service Bus がインストールされているホストに、SYSTEM ユーザーとしてログインします。
2. ESB サーバーおよび Oracle Enterprise Service Bus のすべてのプロセスを停止します。
3. Oracle Enterprise Service Bus がインストールされているオペレーティング・システムに応じて、次のようにして Oracle Universal Installer を起動します。

- Microsoft Windows の場合

「スタート」、「すべてのプログラム」、「Oracle - Oracle-Home」、「Oracle Installation Products」、「Universal Installer」の順に選択します。Oracle_Home は、Oracle Enterprise Service Bus をインストールした Oracle ホームの名前です。

- UNIX の場合

オペレーティング・システムのプロンプトで次のコマンドを入力します。

```
./runInstaller
```

Oracle Universal Installer が起動準備中であることを知らせる「Oracle Universal Installer」ウィンドウが開きます。このウィンドウが閉じ、Oracle Universal Installer の「ようこそ」ページが表示されます。

4. 「ようこそ」ページで「製品の削除」をクリックします。
「インベントリ」ダイアログ・ボックスが開きます。
5. 削除する製品を含む Oracle ホームを開きます。
6. 「Oracle Enterprise Service Bus」を選択した後、「削除」をクリックします。
「確認」ダイアログ・ボックスが開きます。
7. リストされる製品およびコンポーネントが削除の対象であることを確認した後、「はい」をクリックします。
「削除」ダイアログ・ボックスが開きます。

8. 削除の進行状況を監視します。終了後、「インベントリ」ダイアログ・ボックスで「閉じる」をクリックします。

注意：「削除」では、インストール後に作成されたファイル（たとえばプロジェクト・ファイル、サーバー・ファイル、ログ・ファイルなど）は削除されません。これらのファイルおよびディレクトリは手動で削除する必要があります。Oracle ホームの下にある **integration** ディレクトリは、必要なファイルをバックアップした後に削除するようお勧めします。

9. 「ようこそ」ページで「取消」をクリックした後、確認を求められたら「はい」をクリックします。
10. コンピュータを再起動して、削除に関連した残りのプロセスを停止します。
11. `server.xml` ファイルから、`ORACLE_HOME/integration/esb` ディレクトリを指すすべてのエントリを削除します。`server.xml` ファイルは、`ORACLE_HOME/j2ee/home/config` ディレクトリにあります。

例を次に示します。

```
<shared-library name="oracle.db.lite" version="10.1.3">
  <code-source path="C:\product\10.1.3\OracleAS
_Mid\integration\esb\lib\olite40.jar" />
</shared-library>
<shared-library name="apache.commons" version="10.1.3">
  <code-source path="C:\product\10.1.3\OracleAS
_Mid\integration\esb\lib\commons-fileupload-1.1.jar" />
  <code-source path="C:\product\10.1.3\OracleAS
_Mid\integration\esb\lib\commons-codec-1.3.jar" />
  <code-source path="C:\product\10.1.3\OracleAS
_Mid\integration\esb\lib\commons-transaction-1.0.jar" />
  <code-source path="C:\product\10.1.3\OracleAS
_Mid\integration\esb\lib\commons-collections-2.1.jar" />
  <code-source path="C:\product\10.1.3\OracleAS
_Mid\integration\esb\lib\commons-io-1.1.jar" />
  <code-source path="C:\product\10.1.3\OracleAS
_Mid\integration\esb\lib\commons-dbc-20031203.jar" />
  <code-source path="C:\product\10.1.3\OracleAS
_Mid\integration\esb\lib\commons-pool-1.1.jar" />
</shared-library>
```

12. 削除されたインスタンスの Oracle ホーム・ディレクトリに残っているファイルを削除します。

注意：

- Oracle Enterprise Service Bus を削除して再度同じ Oracle ホームにインストールする場合は、最初に `Oracle_Home` の下のファイルとサブディレクトリを削除してから Oracle Enterprise Service Bus を再インストールしてください。
 - 同じ OUI のインストール・セッション内で、同一の Oracle ホームに削除後再インストールすることはできません。削除後に OUI を終了し、ディレクトリ構造をクリーンアウトした後に新たなインストールを再起動します。
-

Integration Repository Creation Assistant

この付録では、Integration Repository Creation Assistant の使用方法を説明します。内容は、次のとおりです。

- [Integration Repository Creation Assistant について](#) (A-2 ページ)
- [システム要件](#) (A-2 ページ)
- [Integration Repository Creation Assistant の実行](#) (A-2 ページ)

Integration Repository Creation Assistant について

Integration Repository Creation Assistant は、Oracle Enterprise Service Bus の oraesb スキーマを作成して Oracle Database にロードするために使用するコマンドライン・ユーティリティです。Oracle Enterprise Service Bus を Oracle Application Server 10g (10.1.3.1.0) の中間層にインストールする場合は、Integration Repository Creation Assistant を実行する必要があります。

システム要件

Integration Repository Creation Assistant を使用するための要件は、次のとおりです。

- Oracle Database

関連項目： サポートされるデータベースのバージョン一覧は、1-6 ページの「サポートされるデータベース」を参照してください。

- JDK 1.4 または 1.5
- 表領域用の 120MB のディスク領域

多言語環境で Oracle Enterprise Service Bus を実行する場合は、Unicode (AL32UTF8) データベース・キャラクタ・セット・エンコーディングの使用をお勧めします。Unicode 以外のキャラクタ・セット・エンコーディングを使用すると、データが失われたり、誤って解釈される可能性があります。

Integration Repository Creation Assistant の実行

Integration Repository Creation Assistant は、Oracle Database がインストールされているマシン上で、または sqlplus がインストールされているリモートの Oracle Client から実行する必要があります。

Integration Repository Creation Assistant ユーティリティを実行するには、次の手順を使用します。

1. sqlplus を使用してローカルまたはリモートの Oracle Database に接続できるように、ORACLE_HOME を環境内に設定します。
2. 次のような構成のコマンドで、Oracle Database に SYS データベース・ユーザーとして接続できることを確認します。

```
$ORACLE_HOME/bin/sqlplus "sys/sysPassword@serviceName as sysdba"
```

3. ORACLE_HOME に、A-2 ページの「システム要件」にリストされている有効なバージョンの JDK が含まれていない場合は、JAVA_HOME を正しい JDK バージョンに設定します。
4. ターゲット・データベースに Oracle Enterprise Service Bus のユーザーが存在する場合、そのユーザーがログアウトしていることを確認します。Integration Repository Creation Assistant は、既存のデータを上書きする前にプロンプトを表示します。
5. irca.zip ディストリビューションを、適切なディレクトリに解凍します。
6. irca.sh コマンドを実行して、ターゲット・データベースにスキーマをロードします。Integration Repository Creation Assistant では、サイレントおよび対話の 2 つのモードが提供されています。

サイレント・モードでは、次の構文を使用して 1 つの文字列にすべての実行パラメータを用意します。

```
irca[.sh] oraesb "db_host db_port db_service_name" sys_password [-overwrite] ORAESB oraesb_password
```

対話モードでは、ロードするスキーマのみを指定してコマンドを起動します。

```
irca[.sh] oraesb
```

ユーティリティから、データベースの詳細およびパスワードを求めるプロンプトが表示されます。

索引

C

CD-ROM
内容, 2-2
Cookie
Web ブラウザ, 1-6

D

doc ディレクトリ, 2-2

E

ESB Console, 1-3, 1-4
サーバー・ロケール, 1-7
ESB サーバー, 1-3, 1-4
esb ディレクトリ, 2-2

F

Firefox 1.0.4, 1-6

I

Integration Repository Creation Assistant, 2-4
システム要件, A-2
実行, A-2
説明, A-2
Internet Explorer, 1-6
IRCA
IRCA の実行, A-2
システム要件, A-2
説明, A-2

J

Java Development Kit のサポート, 1-6

M

Mozilla 1.7, 1-6

N

Netscape 7.2, 1-6

O

Oracle Database Lite, 1-3
Oracle Enterprise Service Bus
インストール, 1-3
削除, 2-14
Oracle Enterprise Service Bus のコンポーネント, 1-2
ESB Console, 1-2
ESB サーバー, 1-2
ESB メタデータ・サーバー, 1-2
Oracle JDeveloper, 1-2

R

README_ESB.txt ファイル, 2-2

U

UTF-8
XSLT マッパー, 1-7

W

Web ブラウザ
Cookie, 1-6

X

XSLT マッパー
UTF-8, 1-7
XSLT マッパー解析, 1-7

い

インストール

- Oracle Enterprise Service Bus CD-ROM の内容, 2-2
- インストール後, 2-8
- インストール作業, 2-5
- インストール前の作業, 2-3
- 概要, 2-2
- 作業のサマリーと手順の参照先, 2-2
- システム要件, 1-4
- 送信 HTTP プロキシ情報, 2-6
- データベースの指定, 2-6
- インストール後の作業, 2-8
 - ディレクトリ構造の理解, 2-9
 - デフォルト・パスワードの変更, 2-8
- インストールされるコンポーネント, 1-4
- インストール・シナリオ, 1-3
 - Oracle Enterprise Service Bus with Oracle SOA Suite, 1-3
 - OracleAS Middle Tier のインストール, 1-4
 - アップグレードされた OracleAS Middle Tier へのインストール, 1-4
- インストール・タイプ, 1-4
 - Oracle Enterprise Service Bus for OracleAS Middle Tier, 1-4
- インストールのためのソフトウェア要件, 1-5
- インストールのためのハードウェア要件, 1-5
- インストール前, 2-3
 - Integration Repository Creation Assistant, 2-4
 - Oracle Application Server のインストールまたはアップグレード, 2-4
 - Oracle Database のインストール, 2-4

く

- グローバリゼーション・サポート, 1-7

さ

サーバー・ロケール

- Oracle Enterprise Service Bus Console, 1-7
- サイレント・インストール, 2-10
- サイレント削除, 2-10, 2-14
- サイレント / 非対話のインストールおよび削除, 2-9
 - インストール, 2-13
 - インストール後, 2-13
 - インストール前, 2-11
 - サイレント・インストール, 2-10
 - 削除, 2-14
 - セキュリティ, 2-13
 - 非対話インストール, 2-10
 - レスポンス・ファイルの作成, 2-11
- 削除, 2-14
- 削除の手順, 2-14
- サポートされる Web ブラウザ, 1-6
 - Firefox 1.0.4, 1-6
 - Internet Explorer, 1-6
 - Mozilla 1.7, 1-6
 - Netscape 7.2, 1-6
- サポートされるデータベース, 1-6

し

システム要件, 1-4

- Java Development Kit, 1-6
- オペレーティング・システムおよびコンピュータの要件, 1-5
- サポートされる Web ブラウザ, 1-6
- サポートされるデータベース, 1-6

せ

- セキュリティ, 2-13

て

ディレクトリ

- doc, 2-2
- esb, 2-2
- ディレクトリ構造, 2-9

れ

- レスポンス・ファイル, 2-11
 - テンプレートからの作成, 2-11
 - 変数, 2-12
 - 例, 2-12
 - レコード・モード, 2-11